2010 年度国際経済学 1(火曜日 3 限：計 14 回)　　下川　雅嗣

研究室 2 号館 10 階 1011 号室(内 3576)

ホームページ URL: http://pweb.cc.sophia.ac.jp/shimokawa/

本講義で紹介する経済学の基本的考え方及び国際経済の基礎理論は、現代国際政治経済の諸問題の本質をより深く把握するための重要な道具である。主にミクロ経済学の基礎、貿易理論、貿易政策等を取り扱う。経済学の基礎的な知識を取得していることが望ましいが初心者でも努力次第では取得可能とする。国際経済学 1 と 2 は連続した講義として考える。

＜評価方法＞　成績評価は学期末試験による。

＜教科書＞クルグマン・オブズフェルド（石井・浦田・竹中他訳）(1996)『国際経済―理論と政策：Ⅰ国際貿易』第３版、新世社。←Krugman, P. R. and Obstfeld, M. (2008), *International Economics: Theory and Policy*, 8th Edition, Pearson Education.

＜参考書＞

①矢野誠（2001）『ミクロ経済学の基礎』岩波書店。

→経済学を基礎からきちんとやりたい人はこの本をまず読むことをお薦め。この講義の最初の部分は、「ミクロ経済学の基礎」の内容を取り扱う。これと続編である**矢野誠著(2001)『ミクロ経済学の応用』岩波書店**の 2 冊を熟読すれば、学部レベルの経済学のすべて、及び経済学的な考え方・センスの本質はほぼ修得できる。

②クルグマン（山岡洋一訳）1997 年『クルーグマンの良い経済学、悪い経済学』日本経済新聞社（Krugman, P. 1996, "Pop Internationalism," MIT press**）。⇒日経ビジネス人文庫から文庫本も出ている（780 円）**

→「国と国が競争していると言うのは、危険な妄想であり、経済の基本原理が理解されていないことと、国内政策の怠りを誤魔化すために政治的に利用されているものであり、そのような意識が広がれば、国内政策を一層歪め、国際経済システムを脅かしかねない。」と政治家、官僚、マスコミ、経済評論家の中に蔓延している俗流国際経済論への批判したエッセイの集まり。経済学の知識がなくてもそれなりに読むことが出来るはず。

→特に、以下の章は機会を見つけて読んで欲しい。<第１章：競争力という危険な幻想, 第２章：反論に答える, 第３章：貿易、雇用、賃金,第４章：第三世界の成長は第一世界の繁栄を脅かすか, 第５章：貿易をめぐる衝突の幻想, 第６章：アメリカの競争力の神話と現実, 第８章：大学生が貿易について学ばなければならない常識>

③石川 城太・菊地 徹・椋 寛（2007）『国際経済学をつかむ』有斐閣。

→国際貿易論に焦点を当てた国際経済学の初級入門書。そのエッセンスを 8~10 ページの「ユニット」ごとにまとめ,数式をできるかぎり用いずに図や身近な具体例を用いて丁寧に解説。IT や環境政策が貿易に与える影響など,最新かつホットなトピックも充実。

④ケイブス・フランケル・ジョーンズ（伊藤隆敏監訳、田中勇人訳）(2003)『国際経済学入門：①国際貿易編』第９版、日本経済新聞社。

→国際経済学の第一人者３人によるスタンダードなテキスト。様々なトピックを扱う包括的なテキストで、新しい課題や理論も取り込んでいる。

⑤Ray, D. (1998), *Development Economics,* Princeton University Press.→ch.16-18.

→簡潔にまとめられている。既習者が整理のために読みには役に立つ。本全体は国際政治経済学全体への開きをもった開発経済学の大学 4 年生または大学院１年生レベルの標準的テキスト。

⑥木村福成（2000）『国際経済学入門』日本評論社。

→国際政治経済論的視点を意識しながら、国際経済について(日本人)経済学者の視点から理論的にきちんと論じたもう一つの本。内容はテキストとほぼ同一。テキストより数式や理論の展開がより厳密に行われている。ある程度の経済学の知識（ミクロ経済学）が前提とされている。事例はテキストよりは少ないがしばしば日本のデータを用いている。

⑦矢野誠（2005）『「質の時代」』のシステム改革：良い市場とは何か？』岩波書店。

→市場の本質的役割や性質、すなわち経済学のセンスを様々な例を用いて説明。特に日本経済の問題点を指摘。①の副読本。

****

［授業計画］あくまでも目安。後期にずれ込む可能性大。

1. 経済学の基本的考え方と限界Ⅰ：市場経済の原理、自発的行動の原則→①１章、⑦

2, 3. 経済学の基本的考え方と限界Ⅱ：合理的選択、貧困、経済学的分析方法→①１章、⑦

4, 5. ミクロ経済学の基礎Ⅰ:消費者理論→①２章、⑦

6. ミクロ経済学の基礎Ⅱ:生産者理論→①５章、⑦

7. ミクロ経済学の基礎Ⅲ:市場均衡→①７章、⑦

8, 9. 労働生産性・比較優位・貿易（リカードモデル）Ⅰ→テキスト２章、②４章、④5 章。
リカードモデル（貿易は競争か協力か)。国の競争力という考えの間違い。ある国の生産性の上昇は他の国にとって望ましくないと言う誤解。

10. 11. 特殊要素と所得分配:→テキスト３章、④6 章。
貿易の政治経済学の基本的理解（なぜ保護貿易が生じるか)。特殊要素モデルの説明と帰結。オランダ病（豊富な天然資源は経済発展を停滞される可能性がある)。

12. 資源と貿易Ⅰ：ヘクシャー＝オリーン・モデル→テキスト４章。②3, 4 章、④7, 8 章。

13. 資源と貿易Ⅱ：ストルバー・サミュエルソン効果とリプチンスキー効果→同上

14. 資源と貿易Ⅲ：→同上。

・先進国内の国内貧富の差の拡大は第三世界との貿易が原因という俗説は本当か？

・第三世界の成長は第一世界の繁栄を脅かさない。

【後期予定（国際経済学Ⅱ)】

1.国際貿易の基本モデルⅠ：交易条件。2.国際貿易の基本モデルⅡ：経済成長、国際所得移転（海外援助、戦後賠償)、貿易政策の影響。3. 規模の経済と国際貿易Ⅰ：産業内貿易。4. 規模の経済と国際貿易Ⅱ：外部経済と国際貿易。5, 6. 国際貿易の厚生効果と貿易政策。7. 発展途上国における貿易政策Ⅰ：輸入代替工業化政策。8. 発展途上国における貿易政策Ⅱ：輸出促進工業化政策。9. 発展途上国における貿易政策Ⅲ：事例紹介。10, 11 先進国の産業貿易政策：戦略的貿易政策、事例紹介。12. 国際資本移動と国際労働移動。